

アサヒ精版印刷の先代社長、築山敬志朗さんが亡くなって、11月20日で1年を迎えた。「この1年はすごい早かった」と振り返るマリさん(築山万里子さん)=写真=はこの日、スタッフと会社の隣のカフェでランチ会をすることにした。

先代の旅立ちについては、喪中はがきも出せず、取引先への通知もできていないので、年内にあいさつ文を出すことにした。マリさんとスタッフ9人の連名で、全員が何かデザインを作って載せることに決めた。

さて、その文面は「A-gene press (エージーンプレス)」という新業態の発足を知らせるものだ。Aはアサヒ精版のA、geneは遺伝子で、「アサヒ精版の遺伝子」という意味になる。「先代の『自由で愛ある精神』を受け継ぎ、(中略)ユニークな創造性を表現し、感性と喜びを発信する場として、挑戦し続けてまいります」と続くが、具体的に何をしたいのかはこの一文だけではわからない。

マリさんは、会えばいつも涼やかに笑んでいるが、実は会社の経営は3年前にパパから社長を引き継いで以来、右肩下がりが続いている。病床のパパに経営報告をしようとして、「聞きたない」と断られたほど。安価で手軽なネット印刷の伸長などで印刷業界を取り巻く環境は厳しさを増すばかり。いくらコストのかかる印刷機械を持っていないとはいっても、アサヒ精版も無縁ではられない。それどころか、幾多の協力工場あってこそだから、そっちへの目配りも必要になる。

実は、この連載が始まった昨秋から、マリさんは改革に着手した。ホームページを一新し、会社のミッションを「ユニークな創造性のキュレート」と「感性と喜びの発信」と定義した。キュレートとは、情報を収集、整理、要約、公開して共有すること。

試みの一つが協力工場の公開らしい。まだ準備段階とのことだが、ここをオープン化することで、お客さんからより工場に対する興味や信頼を持ってもらえる場にする。また工場同士の情報交換の場にもなるのだという。「工場を持たない印刷会社」ならではの試みだ。そして、一つの印刷物を仕上げるには幾つもの工場やたくさんの職人が関わっていることを伝え、印刷物の価値をあげていくことが自社の使命だ、と。

昨年の夏の盛り、協力工場に取材に伺った時、同行したマリさんが工場の社長にこの試みを説明し、「工場つぶしたら何もできひんので、ちゃんと利益が出るようにしないと」と語ると、社長も「手がける内容の難しさは上がってんのに、値段(工賃)は変わらんから」と応じた。工場がなくなると、職人技もそこで途絶えてしまう、という危機感がマリさんにはあるのだ。

パパがいなくなってから、オフィスを片付けて、本人が気に入っていたパナマ帽のスナップショットを引き伸ばして掲げた。パパをよく知る人からの紹介でこの夏、新入社員を雇った。パパも大事にした「ご縁」を感じる。

社長交代に当たって、何の引き継ぎもなかったそうだが、マリさんはシマダタモツさんや東學さんやらが顔をそろえ、村上美香さんが司会を務めた就任パーティーでこう語った。

「紙や印刷物、本はなくなるらない」「そしてまだまだベテランの時代が利いてくるとってます」

パパとマリさんは、仕事のやり方は全く違うが、同じところを見据えていたんだろう。だからこそ「遺伝子」という言葉が出てくるのだ。



愛と自由の  
遺伝子の